カマキリハンドルの自転車“カマチャリ”

― 若者から見た地方の若者文化 ―

High Rise Handlebar Bicycle ‘Kamachari’
- Assessing Youth Local Culture from the Young People’s Perspective -

伊豆田　義　人　　中　川　　恵　　近　藤　美　月
Giido Izuta, Megumi Nakagawa and Mizuki Kondo

山形県立米沢女子短期大学
『生活文化研究所報告』
第45号　抜刷
２０１８年３月

カマキリハンドルの自転車“カマチャリ”
― 若者から見た地方の若者文化 ―

High Rise Handlebar Bicycle 'Kamachari'
- Assessing Youth Local Culture from the Young People's Perspective -

伊豆田　義人　　中川　恵　　近藤　美月
Giido Izuta, Megumi Nakagawa and Mizuki Kondo

要　旨

本研究では若者によるカマキリハンドル付きの自転車の使用率がほかのところに比べ多いと言われている東北地方の或る地域にて、“カマチャリ”と地元で呼んでいるこのタイプの自転車に対する若者の考え方や評価を調査した。いわゆる、地方の若者文化という範疇の中で、若者による若者文化の評価を試みた。このためには、事前にインタビュー方式で大学生を中心に、目撃の際の印象等を確認したうえで、アンケート調査項目を決定し、30 項目により構成された評価票は、後の因子分析のために、7 段階で評価するようにした。調査は地元の高等学校の協力を得て行い、457 名からの回答を回収したが有効なものは 396 票（1 年生 136 人、2 年生 150 人、3 年生 112 人）である。データの処理は R とエクセルで行った。R は学年別男女別の因子分析、エクセルは各因子を構成する項目の集計に活用した。結果は若者文化の文脈の下で考察した。

キーワード：若者文化、地方の若者文化、自転車文化、カマキリハンドル、カマチャリ

１．序論
１．１　背景および目的

カマキリハンドルの自転車は、図 1 に示すようにハンドルがU字の形になっており、通常のハンドルより長いものである。これはエープハンガー（ape hanger）またはハイライズ（high rise）バーの自転車と呼ばれ、1960 年代に新聞配達のサックがハンドルのところに収まるように設計されたことに始まり、そして自転車をオートバイのスタイルにカスタマイズする流行で人気を博した後、1970 年にイギリスで流行った［1（317 頁）］。日本では 1980 年代にブリヂストンサイクル社が製造したアップハンドの「カマキリ」自転車で普及したが［2］、1990 年代後半には見られなくなった［3］。

しかし、東北地方では中高生の利用者を中心にその姿をちらほらと確認することができるほか、極めてローカルではあるが、若者文化という捉え方が可能なほどまだ乗られていると言えよう。

このような背景を踏まえて、本研究では本学の学生の間でカマキリハンドル自転車の使用率が高いという評判の地域にて調査研究を行った。この地域は、東北地方にあり、地元の若者はこのタイプの自転車を“カマチャリ”と呼んでいる。研究の目的は、同世代の人たちがその若者文化をどういうふうに見ているかを調査することで、その文化が進化あるいは形を変えて続く過程への手がかりを得ることである。

研究を遂行するにあたり、大学生を対象とした事前のインタビュー調査にて、カマチャリが与える印象等を確認して、7 段階評価の 30 項目を選定しアンケート調査票を作成した。調

査は一連の手続きを経てその地域の高等学校で行った。回答者総数は 457 名だったが、有効な回答は 396 票（1 年生 136 人、2 年生 150 人、3 年生 112 人）であった。データの処理は R とエクセルで行った。R は学年別男女別の因子分析、エクセルは各因子を構成する項目の集計に活用した。結果は若者文化の文脈の下で考察した。



図１　カマキリハンドル付きの自転車

１．２　先行研究および関連研究

若者文化の研究は多岐にわたるが、ここでは最初に若者文化や若者文化論について報告や論じたものをいくつか取り上げる。ちなみに、これらは、本研究で用いたアンケートの項目選定の際に、何らかのヒントを与えている。

さて、市川 [4] は戦後の若者文化の文献を調査し、団塊世代、シラケ世代、新人類世代と団塊ジュニア世代のそれぞれの主な若者文化論、論点と特徴をまとめたので、若者文化の研究を俯瞰できる。

またより理論的なものになるが、伊奈 [5] はシカゴ学派の機能主義や批判的機能主義のようなサブカルチャーの理論的な枠組みの中で団塊世代の若者文化について考察したのに対し、岡田 [6] はこのシカゴ学派に加えバーミンガム学派のサブカルチャー研究は『人びとの日常的な生活世界とその象徴的な意味や価値体系の構成要素としてとらえ返した』（同、109 頁）というふうに捉えている。そして、人々の日常生活や社会の問題を包含する概念としてのイデオロギーの枠組みでサブカルチャーを考察した。このようにカマチャリ文化も学生の日常生活の中の構成要素として考えることができると考えられる。

他方で、実情に即した形で広田ら [7] は多元多層的な観点から若者文化を考察した様々な論文をまとめている。これらの執筆は概して居場所の開設・確保、人間関係の構築、アイデンティティの形成といった若者文化が若者に対して有する機能について論じている。これに加え、小谷ら [8] はメディアとアイデンティティとの関係、東京以外の地域・地方の若者や非エリートと呼ばれる若者と若者の文化的な活動の三つのジャンルからなる論文をまとめる

ことで、現在の若者文化の全体像を確認し、少子高齢化社会における若者文化とは何かと問いかけ、考察している。

また、前述とはことなり、“ブランド化”の観点から若者文化を捉えた研究もある。実際に、山口 [9] は、学校制服が女子高生にもたらしたおしゃれの文化について考える中で、様々な理由で女子高生のファッションは負のイメージを引き起こすようになったため、おしゃれをしている女子高生も同類とみなされるにも関わらず、彼女らはその社会的な注目の中で制服姿をブランド化した、と言及している。

なお、伊奈 [10] はフィールドワーク的に調査した若者文化をまとめている。主に地方の若者を対象としたアンケート調査という形で、上京文化やアイデンティティ、自己表現といった地方の若者に関する特有の文化に焦点をあて、ライトミールズの思想の枠組みで分析している。

２．方法

２．１　データ収集と回答者

アンケート調査は、2017 年 8 ～ 9 月に東北地方の高等学校で実施された。学校の快諾を得た上で、先生方に協力のお願いをしてアンケートの配布と回収をしてもらった。アンケートの主旨や内容、データの扱い等については事前に学校に伝えて、また、アンケート用紙の表紙にも記載した。そして、自らの意思で同意して協力してもらった。回収した回投票の総数は 457 名で、有効なものは 396 票（1 年生 136 人、2 年生 150 人、3 年生 112 人）である。

２．２　調査内容とデータ分析

調査項目は表 1 に示す。これは、短大・大学生に対し事前に行ったインタビュー調査により抽出したものである。前述のとおり、聞き取り調査方式で、カマチャリを見た時の印象等を聞いている。アンケートでは、カマチャリに乗った経験等の項目も存在するが、この報告では経験の有無等を考えずに学年別男女別のみの分析を行うので、ここでは省略する。

データの解析は一般的な Windows 8.1 搭載のパソコンと統計処理ソフト R およびマイクロソフト社のエクセルで行われた。R とそのパッケージ psych は主に因子分析に用いられ、エクセルは記述統計学的な処理に活用された。また、因子分析の際には、「Velicer MAP」、「vss complexity」、「cumulative var」と「multiple R square」の値を見ながら、試行錯誤しながら一番良い値を出力する因子数を探し決定した。

あなたが「カマチャリ」に対し持っているイメージ・印象を評価してください。評価基準は 1 から 7 のいずれかです。その中から一つを選択してください。

1. 全くそうではない　2. どうではない　3. ややどうではない
4. どちらとも言えない　5. ややそうだ　6. そうだ　7. 非常にそうだ

Q１「青春・若さ」
Q２「若者の文化」
Q３「ひと時の流行」
Q４「地元の若者ならではの自転車」
Q５「姿勢が良くなりそうな自転車」

Q 6 「乗りやすい自転車」
Q 7 「視界の良い自転車」
Q 8 「便利・快適な自転車」
Q 9 「特定の部活・グループの伝統的な自転車」
Q 10「個性的または特徴的な自転車」
Q 11「楽しそうな自転車」
Q 12「面白い自転車」
Q 13「学生時代の思い出になりそうな自転車」
Q 14「地元の風物詩」
Q 15「安全な自転車」
Q 16「安定感のある自転車」
Q 17「憧れるまたは興味のある自転車」
Q 18「自分の意思に関係なく存続する自転車」
Q 19「バイクっぽい自転車」
Q 20「地方・田舎ならではの自転車」
Q 21「威圧感をかもし出す自転車」
Q 22「次の世代にも残したい自転車」
Q 23「格好良い自転車」
Q 24「地元の気候に適した自転車」
Q 25「認められていない自転車」
Q 26「乗りながら携帯電話や飲食ができそうな自転車」
Q 27「正規の規格を満たしている自転車」
Q 28「一般向けの自転車」
Q 29「代々続いている自転車」
Q 30「若者の考え方と調和した自転車」

表１　評価項目

３．結果

本節では、因子分析による回答の類型化をした後に、各々のグループの集計を行う。

３．１　因子分析

図２は高校一年生男子 76 人の因子分析である。ここでは、4 つの因子を抽出している。因子１は約半分の質問事項を含め、残りの項目は因子２から４に分散している。因子１を構成する項目は Q24「地元の気候に適した自転車」、Q22「次の世代にも残したい自転車」、Q8「便利・快適な自転車」、Q28「一般向けの自転車」、Q6「乗りやすい自転車」、Q23「格好良い自転車」と Q16「安定感のある自転車」、Q17「憧れるまたは興味のある自転車」、Q11「楽しそうな自転車」、Q27「正規の規格を満たしている自転車」、Q7「視界の良い自転車」Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」と Q26「乗りながら携帯電話や飲食ができそうな自転車」であるので、《地元の学生と風土に合う自転車》を反映していると思われる。因子２は Q2「若者の文化」、Q4「地元の若者ならではの自転車」、Q1「青春・若さ」、Q3「ひと時の流行」、Q30「若者の考え方と調和した自転車」と Q29「代々続いている自転車」からなるので、この因子は《若者文化》と呼ぶことができる。因子３は Q20「地方・田舎ならではの自転車」、Q12「面白い自

転車」、Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q21「威圧感をかもし出す自転車」、Q19「バイクっぽい自転車」と Q18「自分の意思に関係なく存続する自転車」により構成されるので、《地方独特の自転車》を表すと言える。因子 4 は Q15「安全な自転車」、Q14「地元の風物詩」、Q5「姿勢が良くなりそうな自転車」と Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」により構成されるので、《地元に定着している安全・快適な自転車》因子と呼ぶことができる。

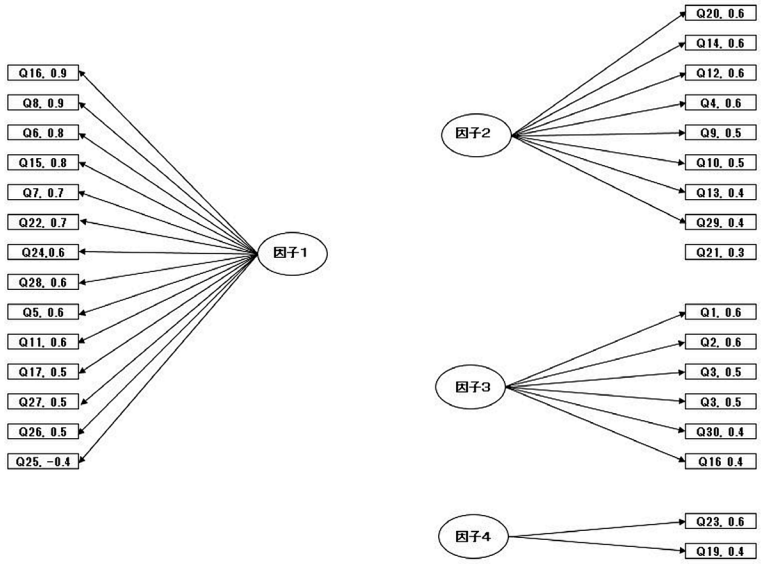


図 2　因子分析–高校 1 年生男子（n = 76 名）

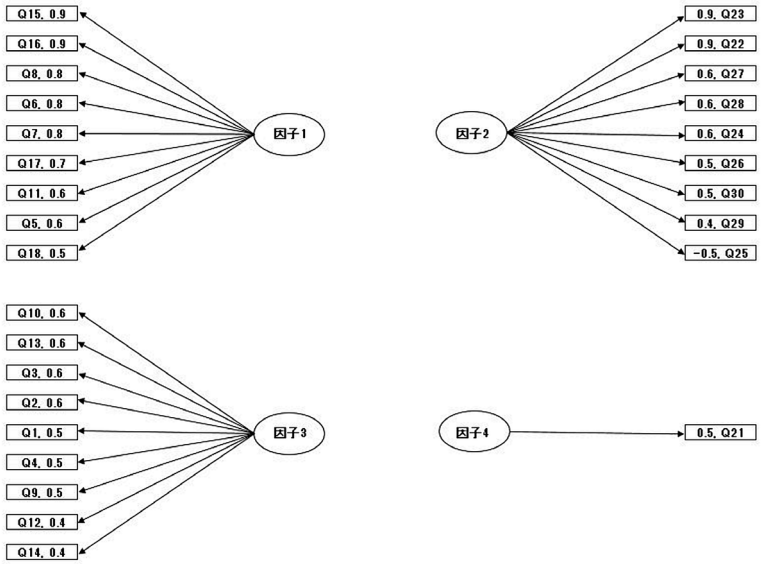


図 3　因子分析–高校 1 年生女子（n = 58 名）

図 3 は高校一年生女子 58 人の因子を示す。因子 1 は Q15「安全な自転車」、Q16「安定感のある自転車」、Q8「便利・快適な自転車」、Q6「乗りやすい自転車」、Q7「視界の良い自転車」、Q17「憧れるまたは興味のある自転車」、Q11「楽しそうな自転車」、Q5「姿勢が良くなりそうな自転車」と Q18「自分の意思に関係なく存続する自転車」によって構成されるので、《人間

工学上の自転車》と呼ぶ。《地元の一般的な自転車》を表す因子２は Q23「格好良い自転車」、Q22「次の世代にも残したい自転車」、Q27「正規の規格を満たしている自転車」、Q28「一般向けの自転車」、Q24「地元の気候に適した自転車」、Q26「乗りながら携帯電話や飲食ができそうな自転車」、Q30「若者の考え方と調和した自転車」と Q29「代々続いている自転車」からなる。因子３は Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」、Q3「ひと時の流行」、Q2「若者の文化」、Q1「青春・若さ」、Q4「地元の若者ならではの自転車」、Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」、Q12「面白い自転車」と Q14「地元の風物詩」を含むので《学生の文化》といえる。因子４は Q21「威圧感をかもし出す自転車」と関係しているので、《異質の自転車》因子と呼ぶことができる。

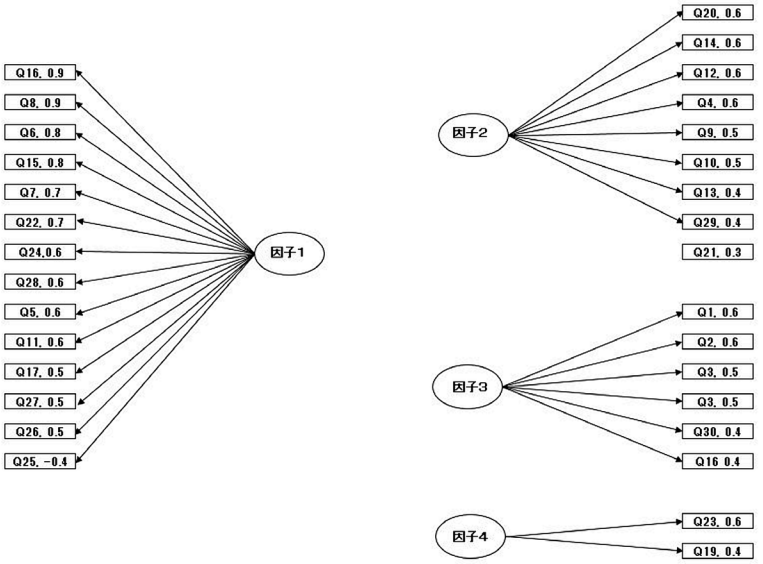


図４　因子分析-高校２年生男子（n = 71 名）

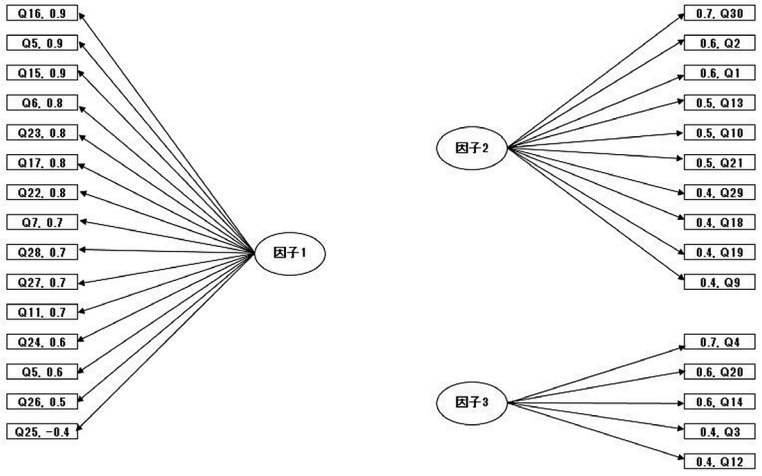


図５　因子分析-高校２年生女子（n = 79 名）

次に、71 人の高校２年生男子の因子分析は、図４にまとめられている通りである。前述と

同様に主な項目を重視すると、因子 1 は《人間工学的に地元に合う自転車》を表すのに対し、因子 2 は《若者文化・異質の自転車》を表現している。また、因子 3 は Q4「地元の若者ならではの自転車」と Q20「地方・田舎ならではの自転車」からなるので、《地方独特の自転車》を指示していると言える。他方で、高校 2 年生女子 79 人の因子分析（図 5）は 4 つの因子を生成している。そこで、因子 1 は Q27、Q23、Q28、Q22、Q17、Q8 等と強い関係を持っているので、《人間工学的に地元に合う自転車》を表している。また、因子 2 は《地方の異質な自転車》で、因子 3 は《地元に合う安全で安定感のある自転車》、因子 4 は《若者の非正規の自転車》とラベル付けすることができる。

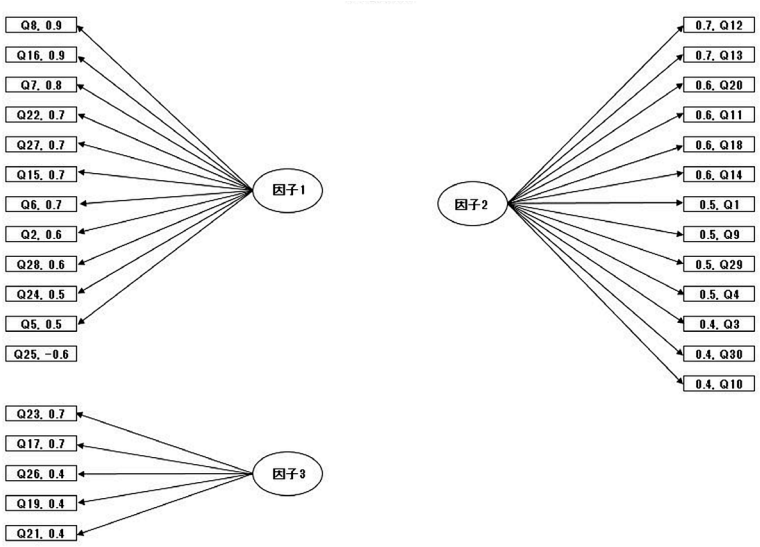


図 6　因子分析–高校 3 年生男子（n = 52 名）

図 6 は高校 3 年生男子（52 名）の因子分析で得られた因子である。Q8「便利･快適な自転車」、Q16「安定感のある自転車」Q7「視界の良い自転車」、Q22「次の世代にも残したい自転車」、Q27「正規の規格を満たしている自転車」、Q15「安全な自転車」、Q6「乗りやすい自転車」、Q2「若者の文化」、Q28「一般向けの自転車」、Q24「地元の気候に適した自転車」と Q5「姿勢が良くなりそうな自転車」からなる因子 1 は《人間工学的に地元に合う・地元の若者の文化と関係のある自転車》を示す。因子 2 は Q12「面白い自転車」、Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」、Q20「地方・田舎ならではの自転車」、Q11「楽しそうな自転車」、Q18「自分の意思に関係なく存続する自転車」、Q14「地元の風物詩」、Q1「青春・若さ」、Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」、Q29「代々続いている自転車」、Q4「地元の若者ならではの自転車」、Q3「ひと時の流行」、Q30「若者の考え方と調和した自転車」と Q10「個性的または特徴的な自転車」と関係しているため、《地元の学生の間で定着している自転車》とまとめることができる。因子 3 は Q23「格好良い自転車」、Q17「憧れるまたは興味のある自転車」、Q26「乗りながら携帯電話や飲食ができそうな自転車」、Q19「バイクっぽい自転車」と Q21「威圧感をかもし出す自転車」により生成されるので、《興味ある異質な自転車》因子と呼ぶ。

高校 3 年生女子（60 名）の回答も三つの因子で表すことができる（図 7）。因子 1 は Q16「安定感のある自転車」、Q8「便利・快適な自転車」、Q6「乗りやすい自転車」、Q7「視界の良い自転車」、Q15「安全な自転車」、Q17「憧れるまたは興味のある自転車」、Q27「正規の規格を満たしている自転車」、Q26「乗りながら携帯電話や飲食ができそうな自転車」、Q5「姿勢が良

くなりそうな自転車」、Q24「地元の気候に適した自転車」と Q28「一般向けの自転車」により構成されるので、《人間工学的に地元に合う・興味のある自転車》を示す。因子 2 は Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q2「若者の文化」、Q1「青春・若さ」、Q30「若者の考え方と調和した自転車」、Q3「ひと時の流行」、Q4「地元の若者ならではの自転車」、Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」、Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」、Q21「威圧感をかもし出す自転車」、Q12「面白い自転車」、Q18「自分の意思に関係なく存続する自転車」、Q14「地元の風物詩」、Q29「代々続いている自転車」と Q20「地方・田舎ならではの自転車」からなり、《地方の若者文化になっている異質な自転車》と呼ぶことができる。因子 3 は Q23「格好良い自転車」、Q22「次の世代にも残したい自転車」、Q11「楽しそうな自転車」と Q19「バイクっぽい自転車」と関係しているので《バイクのように格好良い自転車》である。

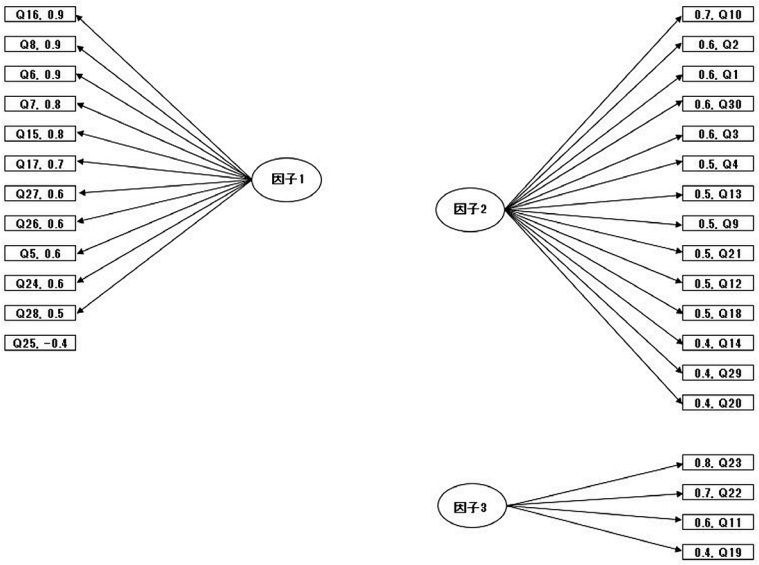


図 7　因子分析–高校 3 年生女子（n = 60 名）

３．２　高１年生の因子に対する集計

高 1 男子の因子 1 を構成する質問事項に対する回答の集計は図 8 に示す。図から容易にわかるように、その特徴は「全くそうではない」の回答が Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」(34.2%)、Q11「楽しそうな自転車」(44.7%) と Q27「正規の規格を満たしている自転車」(48.7%) を除き、半分以上を占めていることであり、二番目に多い回答が「そうである」であるということである。また、これらの質問事項の合計は三分の二以上になっている。

次に、図 9 にあるように高 1 男子の因子《若者文化》の特徴は、「全くそうではない」、「そうではない」、「どちらともいえない」と「ややそうだ」の割合が顕著にあらわれていることである。そこで、非否定的な回答に着目すると、「ややそうだ」が最も多いのは Q4「地元の若者ならではの自転車」(27.6%) と Q2「若者の文化」並びに Q1「青春・若さ」の 17.1% がある。また、「どちらともいえない」が一番多いのは Q3「ひと時の流行」(36.8%)、Q30「若者の考え方と調和した自転車」並びに Q29「代々続いている自転車」の 31.6% である。なお、「全くそうではない」から「ややそうではない」の否定的な回答が 50% 以上を占めているのは Q2「若者の文化」、Q1「青春・若さ」、Q30「若者の考え方と調和した自転車」と Q29「代々続いている自転車」である。

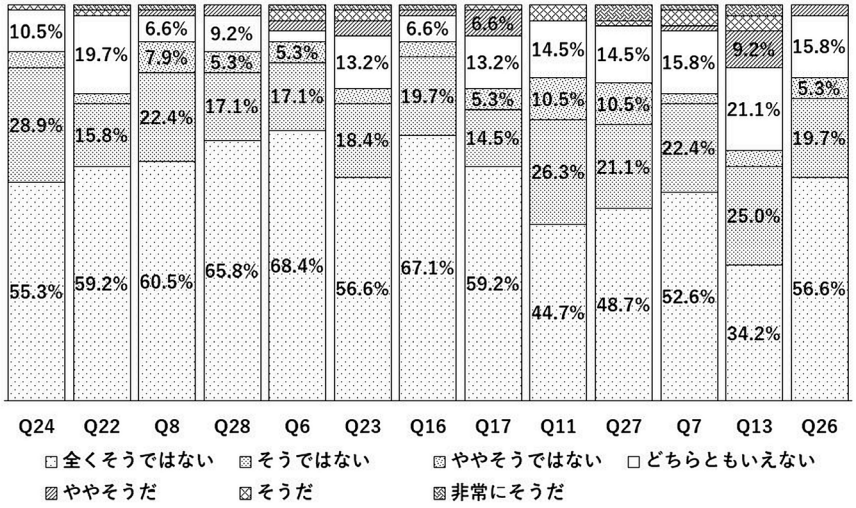


図 8　高 1 男子の因子《地元の学生と風土に合う自転車》

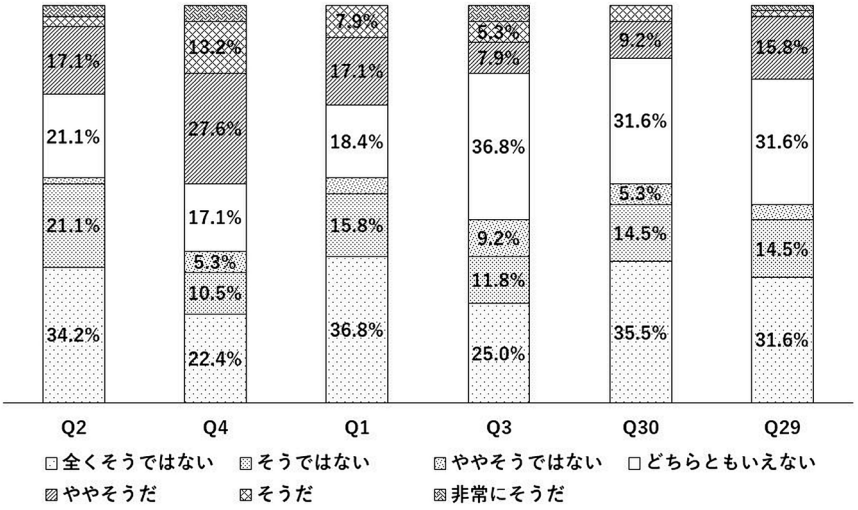


図 9　高 1 男子の因子《若者文化》

因子《地方独特の自転車》を構成する項目の集計は図 10 に提示する。ここでは、Q12「面白い自転車」を除き、肯定的な回答の割合が比較的に大きくなっているということが注目に値する。とりわけ「非常にそうだ」は Q20「地方・田舎ならではの自転車」(28.9%) と Q10「個性的または特徴的な自転車」(15.8%) で最も多い割合になっている。また、これらの質問事項の肯定的な回答の合計は 50% を超えていることがわかる。

因子《地元に定着している安全・快適な自転車》の集計 (図 11) は肯定的な回答の割合が不在している、または著しく少ないという特徴を有する。実際に、肯定的な回答がなかった項目は、Q15「安全な自転車」と Q5「姿勢が良くなりそうな自転車」で、否定的な回答の合計はそれぞれ 90.8% と 88.2% である。一方で、Q14「地元の風物詩」と Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」は前述の《地元の学生と風土に合う自転車》因子と似ているが、ここでの「ややそうだ」の割合が若干大きいという点で異なっている。

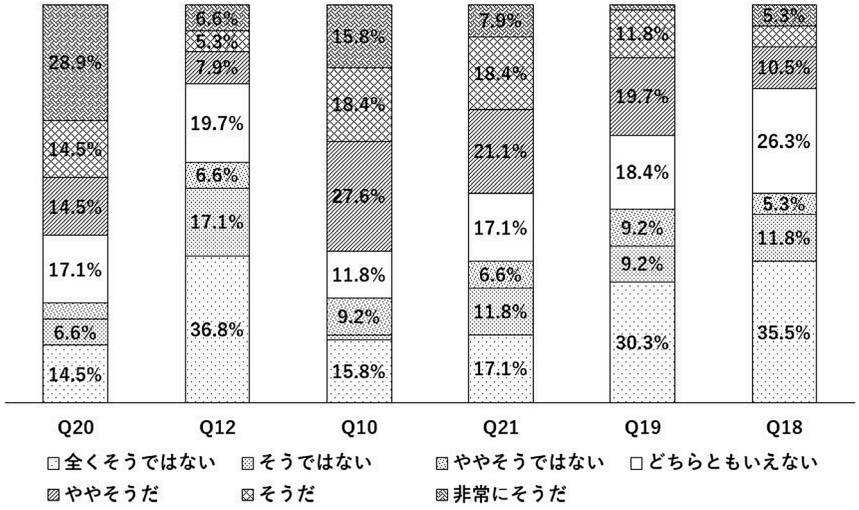


図 10　高 1 男子の因子《地方独特の自転車》

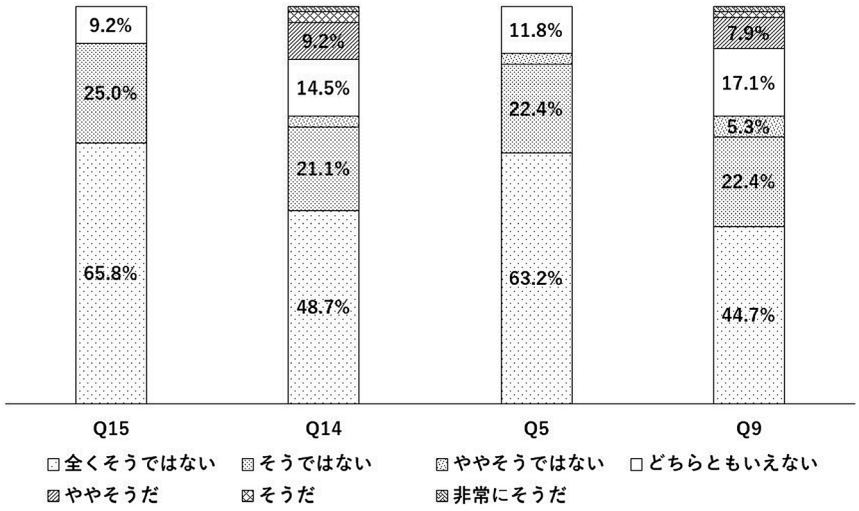


図 11　高 1 男子の因子《地元に定着している安全・快適な自転車》

さて、高 1 女子の因子の集計を考える。否定的および中立的な回答により特徴づけられる因子《人間工学上の自転車》の集計は図 12 のとおりになった。そこで、「どちらともいえない」がもっとも多いのは Q18「自分の意思に関係なく存続する自転車」(55.2%) と Q11「楽しそうな自転車」(29.3%) である。また、「ややそうだ」が Q17「憧れるまたは興味のある自転車」(20.7%) と Q18 (15.5%) で比較的に相当な割合を占めていることに注意されたい。図 12 と類似の回答パターンは図 13 にある因子《地元の一般的な自転車》の集計でも確認できるが、図 13 の肯定的な回答の割合がやや多いという点で異なる。とりわけ、肯定的な回答の合計がもっとも多いのは、Q30「若者の考え方と調和した自転車」と Q29「代々続いている自転車」である。ちなみに、「どちらともいえない」は Q24「地元の気候に適した自転車」(34.5%)、Q30 (36.2%)、Q26「乗りながら携帯電話や飲食ができそうな自転車」(39.7%) でもっと多く、その質問の回答全体の三分の一以上を占めている。なお、「全くそうではない」の割合がもっ

とも多いのは Q28「一般向けの自転車」(50.0%) である。

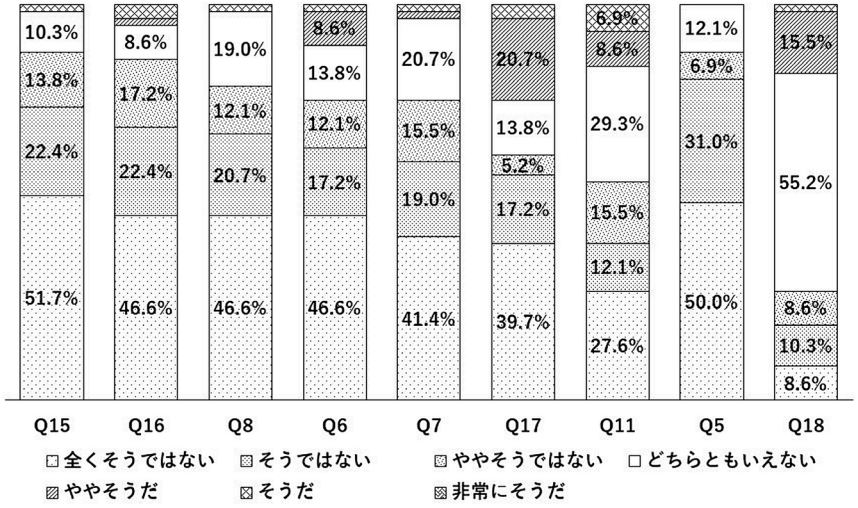


図 12　高 1 女子の因子《人間工学上の自転車》

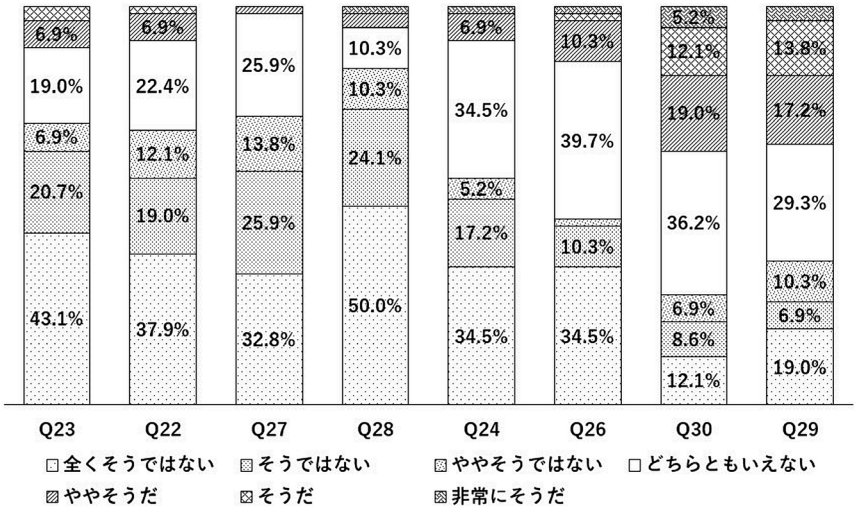


図 13　高 1 女子の因子《地元の一般的な自転車》

高 1 女子の因子《学生の文化》の集計は図 14 にある。肯定的な回答の割合が顕著にあらわれることがわかる。その中でも Q10「個性的または特徴的な自転車」の「ややそうだ」、「そうだ」と「非常にそうだ」の合計は 82.7%に達している。また、「どちらともいえない」、「ややそうだ」、「そうだ」と「非常にそうだ」の合計が 50% 以上になっているのは、Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」、Q3「ひと時の流行」、Q2「若者の文化」、Q1「青春・若さ」、Q4「地元の若者ならではの自転車」と Q12「面白い自転車」である。なお、否定的な回答の割合が 50% を超えているのは Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」と Q14「地元の風物詩」である。

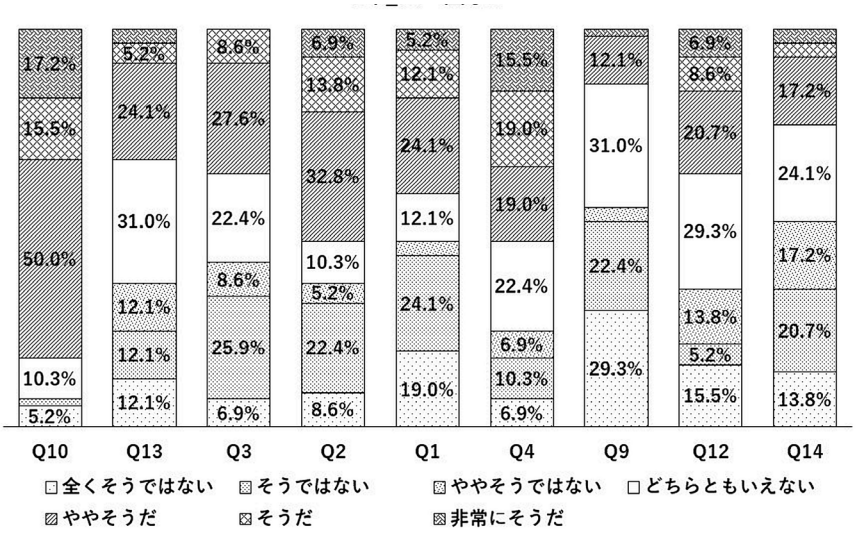


図 14　高 1 女子の因子《学生の文化》

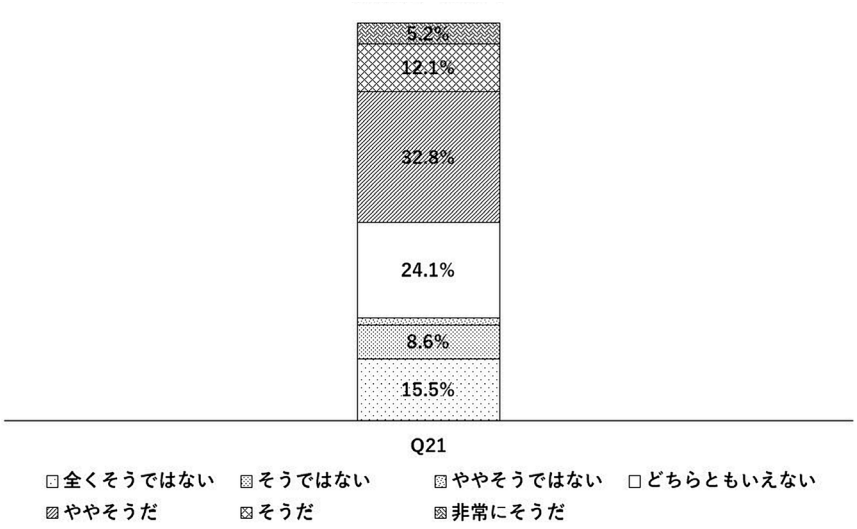


図 15　高 1 女子の因子《異質の自転車》

図 15 の因子《異質の自転車》は Q21「威圧感をかもし出す自転車」のみからなり、肯定的な回答は 50% 以上で、「どちらともいえない」は 24.1% を占めている。

３．３　高２年生の因子に対する集計

高 2 男子の因子《人間工学的に地元に合う自転車》の集計は図 16 のとおりである。質問事項の否定的な回答が三分の二以上を占めていることがその大きな特徴であるが、Q28「一般向けの自転車」を除くと、これらの質問事項の「どちらともいえない」は 10 パーセントを上回っているという点も考慮するべきである。

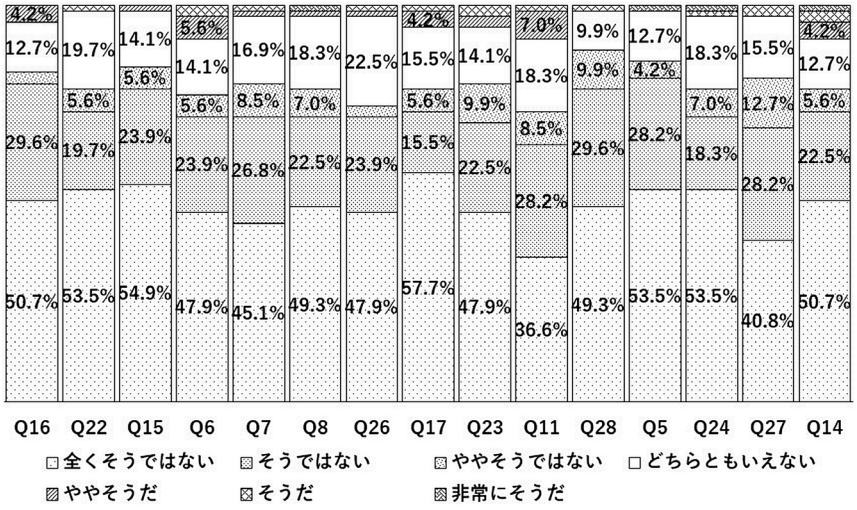


図 16　高 2 男子の因子《人間工学的に地元に合う自転車》

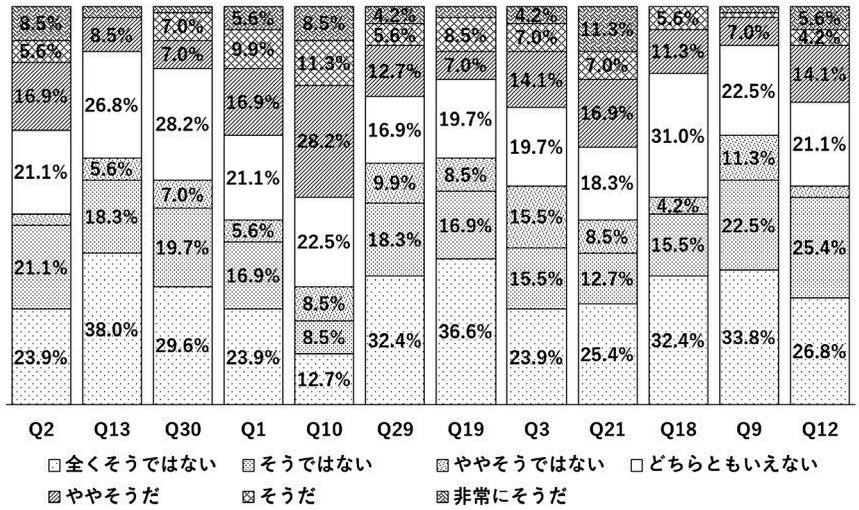


図 17　高 2 男子の因子《若者文化・異質の自転車》

一方で、高 2 男子の因子《若者文化・異質の自転車》の特徴は「どちらともいえない」の割合が 15%以上であること、肯定的な回答が比較的に大きな割合を占めていることである。肯定的な回答の割合は Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q21「威圧感をかもし出す自転車」、Q1「青春・若さ」と Q2「若者の文化」の順に大きくなっている。それに対し、否定的な回答は Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」、Q29「代々続いている自転車」と Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」の順に大きくなっている。

次に、高 2 男子の因子《地方独特の自転車》においては、Q4「地元の若者ならではの自転車」は 15% の「どちらともいえない」を中心に肯定的な回答と否定的なそれが拮抗しているのに対し、Q20「地方・田舎ならではの自転車」の肯定的な回答は 59.2%を、否定的なものは 25.4%を占めている。

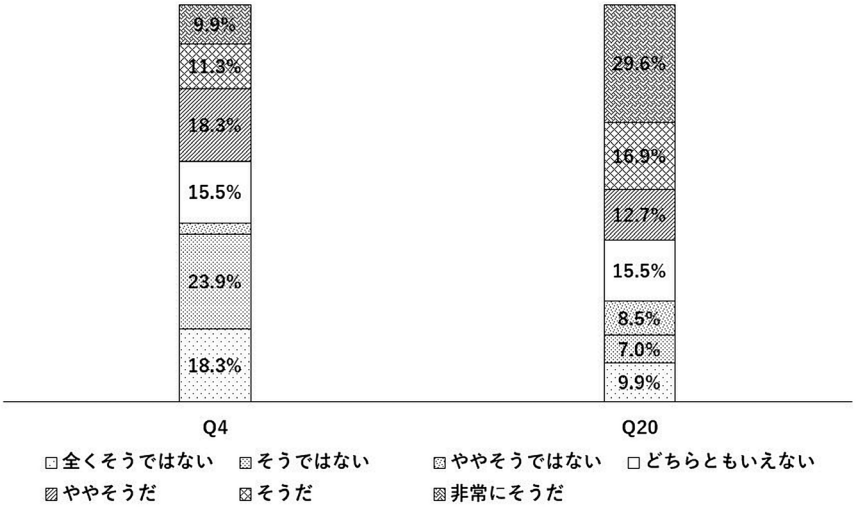


図 18　高 2 男子の因子《地方独特の自転車》

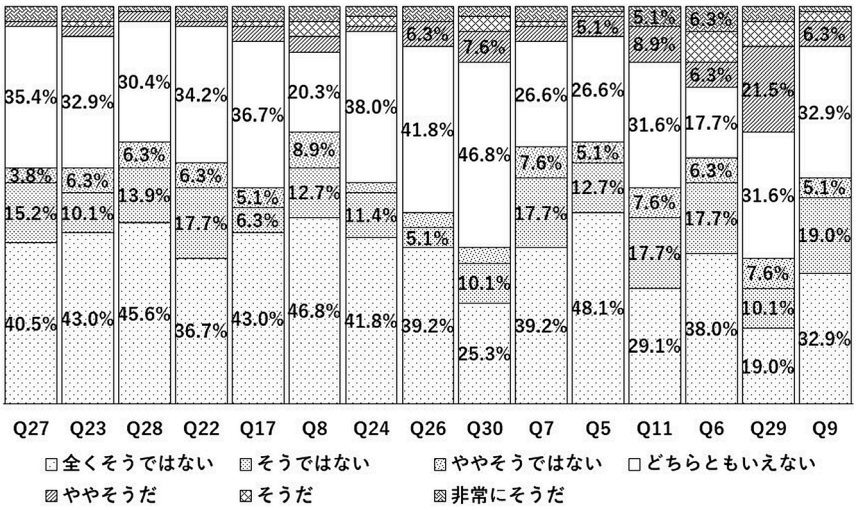


図 19　高 2 女子の因子《人間工学的に地元に合う自転車》

ところで、高 2 女子においては、図 19 に提示する因子《人間工学的に地元に合う自転車》は「全くそうではない」と「どちらともいえない」により特徴づけられる。因子《人間工学的に地元に合う自転車》、Q30「若者の考え方と調和した自転車」、Q11「楽しそうな自転車」、Q29「代々続いている自転車」と Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」では、「どちらともいえない」の方が「全くそうではない」を上回っている。このうちの Q29 の「ややそうだ」の割合も高く、21.5% にも達している。これらの項目以外のものにおいては、否定的な回答になっている。

高 2 女子の因子《地方の異質な自転車》の集計は図 20 のとおりであり、否定的ではない回答を有する項目の集まりである。肯定的な回答が顕著な項目は、Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q4「地元の若者ならではの自転車」と Q20「地方･田舎ならではの自転車」で、「ややそうだ」、「そうだ」と「非常にそうだ」の合計は 50% を超えている。一方で、Q18「自分の

意思に関係なく存続する自転車」を除けば、Q21「威圧感をかもし出す自転車」、Q3「ひと時の流行」と Q19「バイクっぽい自転車」は大きな割合を占める「どちらともいえない」を中心に否定的と肯定的な回答は大体同じである。

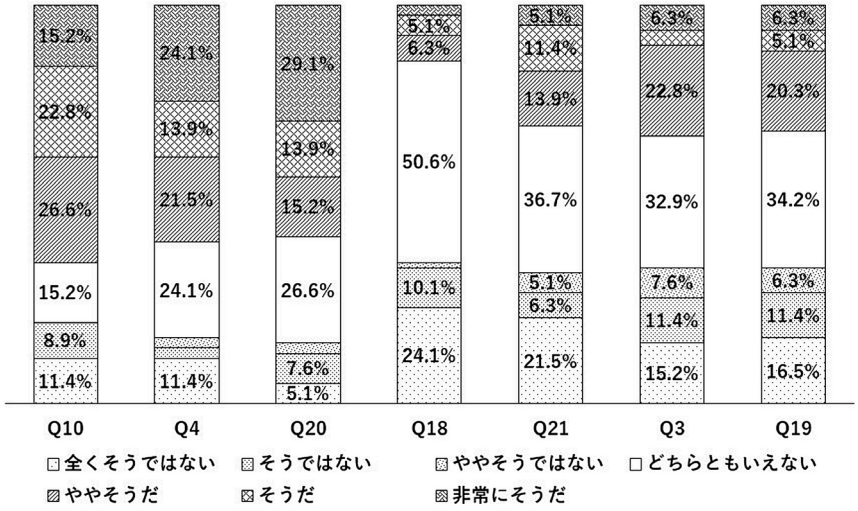


図 20　高 2 女子の因子《地方の異質な自転車》

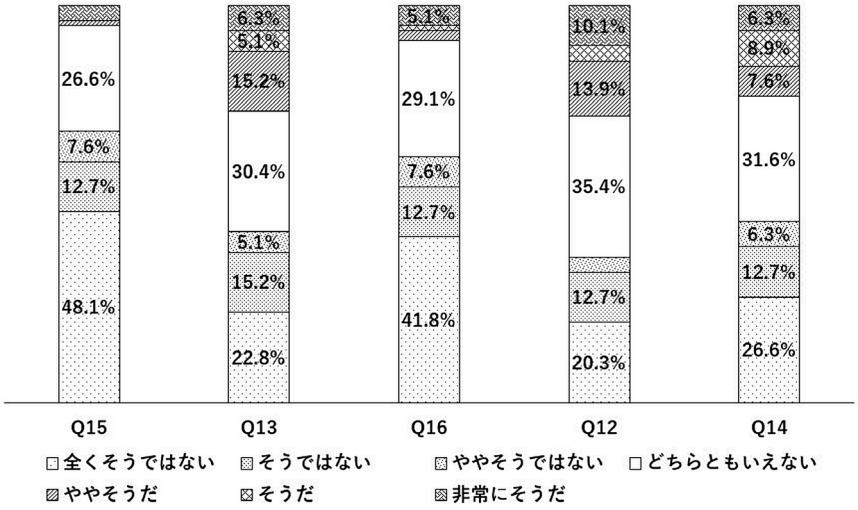


図 21　高 2 女子の因子《地元に合う安全で安定感のある自転車》

次に、図 21 の高 2 女子の因子《地元に合う安全で安定感のある自転車》は図 19 の集計と似ているが、ここでは、非肯定な回答と肯定的・否定的の回答が拮抗している項目からなる。前者には Q15「安全な自転車」と Q16「安定感のある自転車」が属し、後者のグループは残りの質問事項により構成される。

最後に、高 2 女子の因子《若者の非正規の自転車》は Q1「青春・若さ」と Q2「若者の文化」の二つの質問事項からなる。これらの「どちらともいえない」は四分の一ほどで、肯定的と否定的な回答は互いに同程度である。

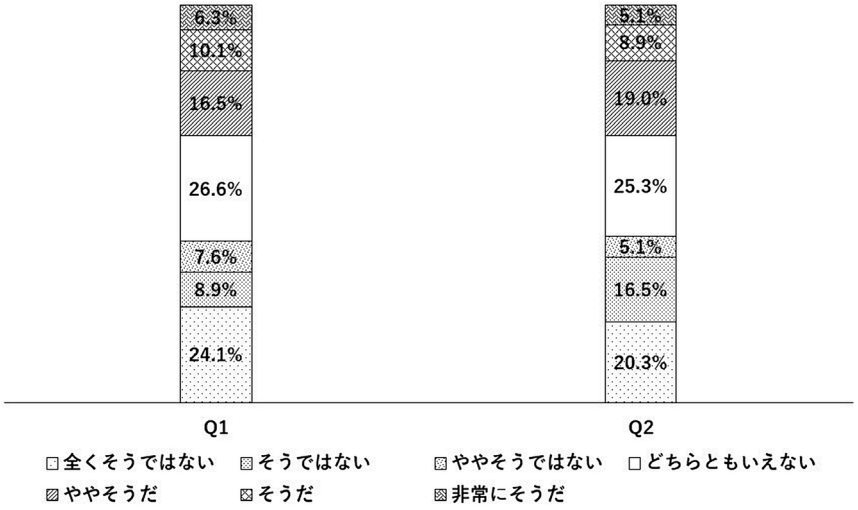


図 22　高 2 女子の因子《若者の非正規の自転車》

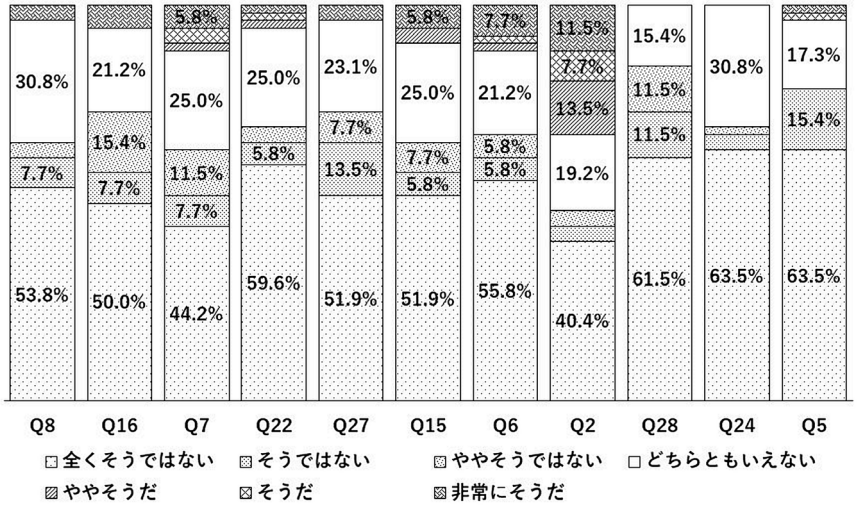


図 23　高 3 男子の因子《人間工学的に地元に合う・地元の若者の文化と関係のある自転車》

３．４　高３年生の因子に対する集計

図 23 は高 3 男子の因子《人間工学的に地元に合う・地元の若者の文化と関係のある自転車》に対する集計である。「全くそうではない」と「どちらともいえない」の高い割合が際立つことがわかる。ただし、Q2「若者の文化」の肯定的な回答は三分の一ほど占めているので注目に値する。また、「どちらともいえない」が最も多いのは 30.8% を占める Q8「便利・快適な自転車」並びに Q24「地元の気候に適した自転車」と 25% を占める Q7「視界の良い自転車」、Q22「次の世代にも残したい自転車」と Q15「安全な自転車」である。なお、Q28「一般向けの自転車」、Q24「地元の気候に適した自転車」と Q5「姿勢が良くなりそうな自転車」の「全くそうではない」は 60% を超えている。高 3 男子の因子《地元の学生の間で定着して

いる自転車》においては、図 24 にあるように肯定的な回答の割合が高くなり、否定的なそれとほぼ拮抗している。そこで、「非常にそうだ」がもっとも多いのは Q20「地方・田舎ならではの自転車」(44.2%)、Q4「地元の若者ならではの自転車」(26.9%) と Q12「面白い自転車」(23.1%) である。また、Q20 と Q4 に対する肯定的な回答は 60% 以上となっている。なお、「どちらともいえない」の割合がもっとも多いのは Q18「自分の意思に関係なく存続する自転車」(32.7%) である。

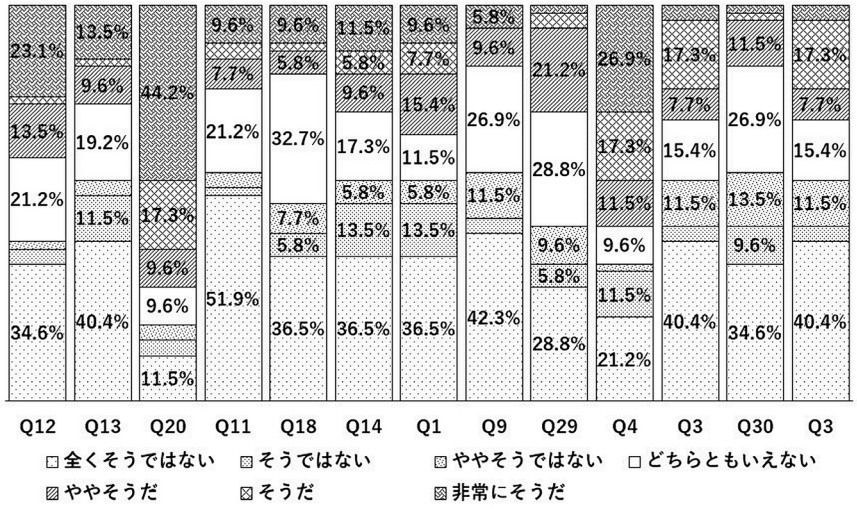


図 24　高 3 男子の因子《地元の学生の間で定着している自転車》

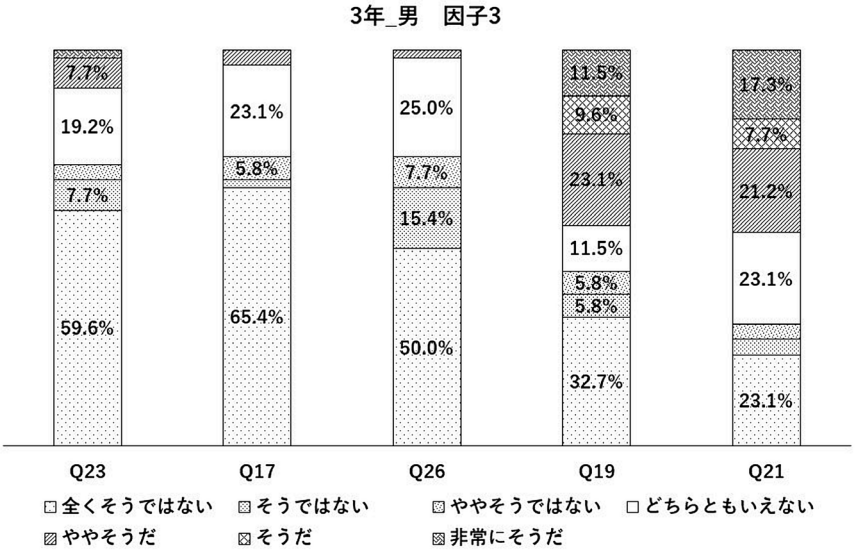


図 25　高 3 男子の因子《興味ある異質な自転車》

図 25 は高 3 男子の因子《興味ある異質な自転車》の集計である。これは、50% を超える「全くそうではない」と 20% 台の「どちらともいえない」を有する Q23「格好良い自転車」、Q17「憧れるまたは興味のある自転車」と Q26「乗りながら携帯電話や飲食ができそうな自転車」からなるほか、肯定的な回答と否定的なそれが拮抗している Q19「バイクっぽい自転車」と

Q21「威圧感をかもし出す自転車」により構成される。

さて、高3女子においては因子《人間工学的に地元に合う・興味のある自転車》に対する集計は図26のようになる。とりわけ目を引くのが「全くそうではない」の高い割合に伴い否定的な回答が50%以上を占めていることである。その中で例外と言えるのがQ7「視界の良い自転車」である。それは、「ややそうだ」の回答が31.7%を占め、二番目に多いQ17「憧れるまたは興味のある自転車」の16.7%の約倍になっているためである。

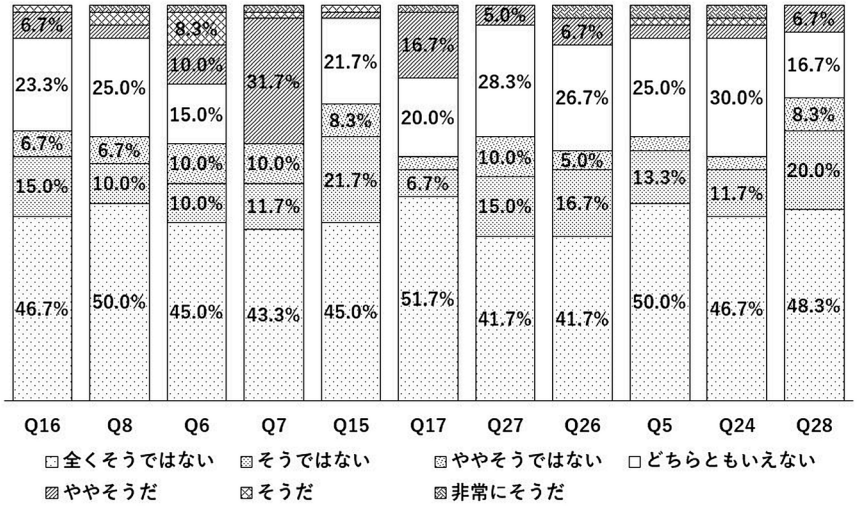


図26　高3女子の因子《人間工学的に地元に合う・興味のある自転車》

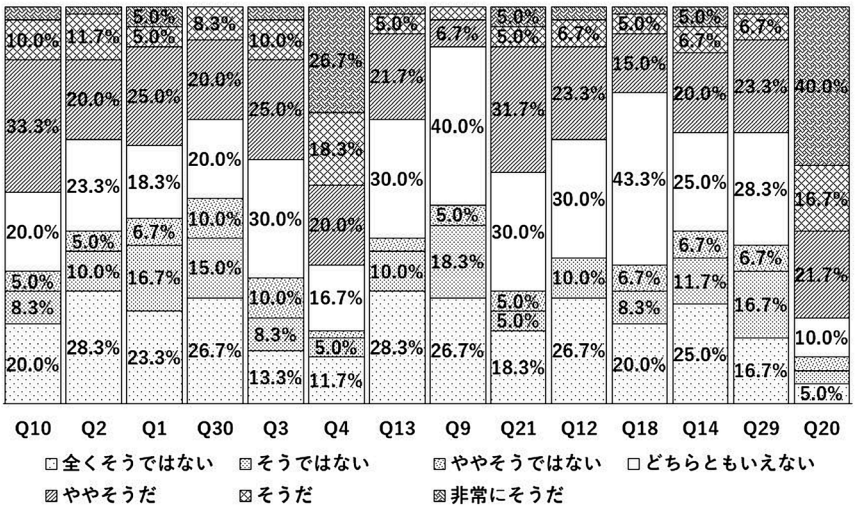


図27　高3女子の因子《地方の若者文化になっている異質な自転車》

次に、図27の高3女子の因子《地方の若者文化になっている異質な自転車》を考える。肯定と否定的な回答が釣り合っている項目が多いことがこの因子の特徴である。肯定的な方に大きく偏っている項目もある。それは、Q20「地方・田舎ならではの自転車」とQ4「地元の若者ならではの自転車」である。また、「どちらともいえない」の割合がもっとも多いのはQ18「自分の意思に関係なく存続する自転車」(43.3%)とQ9「特定の部活・グループの伝統

的な自転車」(40.0%) である。

最後に高3女子の因子《バイクのように格好良い自転車》(図28) を取り上げる。このグループは否定的な回答が60% を超えている Q23「格好良い自転車」および Q22「次の世代にも残したい自転車」と、肯定的な回答の割合が四分の一以上になっている Q11「楽しそうな自転車」と Q19「バイクっぽい自転車」からなるが、「どちらともいえない」の割合がもっとも多いのは Q19 である。

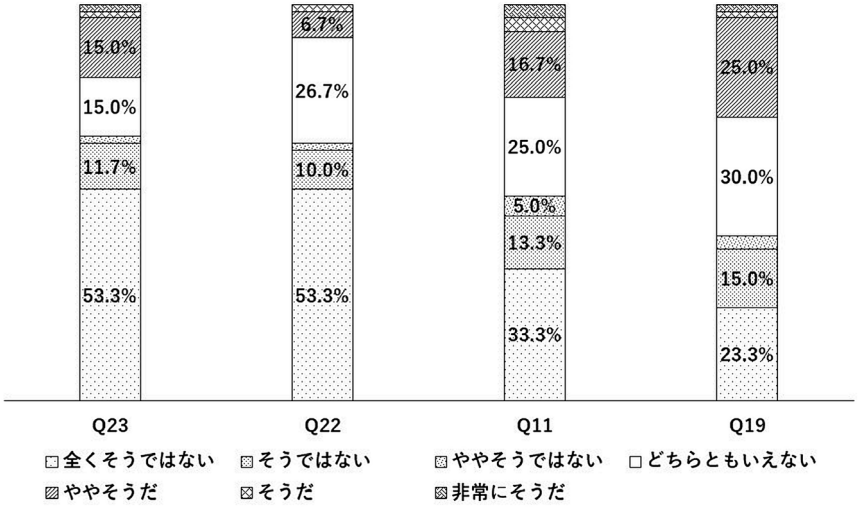


図 28　高 3 女子の因子《バイクのように格好良い自転車》

4．考察

前述の結果により高 1 男子の相当な割合は Q20「地方・田舎ならではの自転車」、Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q4「地元の若者ならではの自転車」、Q2「若者の文化」、Q1「青春・若さ」、Q14「地元の風物詩」と Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」に対して肯定的に回答している一方で、高 1 女子は、Q17「憧れるまたは興味のある自転車」、Q18「自分の意思に関係なく存続する自転車」、Q30「若者の考え方と調和した自転車」、Q29「代々続いている自転車」、Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」、Q3「ひと時の流行」、Q2「若者の文化」、Q1「青春・若さ」、Q4「地元の若者ならではの自転車」と Q12「面白い自転車」を支持している。これは、高 1 生全体として、カマチャリを個性的な自転車とみて、地方の若者文化として認識していることを表している。

次に、高 2 男子に着目すると、肯定的な回答が見られたのは、Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q21「威圧感をかもし出す自転車」、Q1「青春･若さ」、Q2「若者の文化」、Q20「地方･田舎ならではの自転車」であった。高 2 女子の場合は、Q29「代々続いている自転車」、Q9「特定の部活・グループの伝統的な自転車」、Q10「個性的または特徴的な自転車」、Q4「地元の若者ならではの自転車」、Q20「地方・田舎ならではの自転車」、Q21「威圧感をかもし出す自転車」、Q3「ひと時の流行」、Q19「バイクっぽい自転車」、Q13「学生時代の思い出になりそうな自転車」Q12「面白い自転車」、Q1「青春・若さ」と Q2「若者の文化」であった。1 年生と 2 年生とで大きくことなるのは、Q21 の出現で否定的な皆方がでてくる一方で、面白いという見方もある。

高３男子の肯定的な回答は、Q2「若者の文化」、Q20「地方･田舎ならではの自転車」、Q4「地元の若者ならではの自転車」、Q12「面白い自転車」、Q4「地元の若者ならではの自転車」とQ20「地方・田舎ならではの自転車」で、肯定と否定に分かれたのはQ19「バイクっぽい自転車」、Q21「威圧感をかもし出す自転車」であり、３年女子は、Q7「視界の良い自転車」、Q17「憧れるまたは興味のある自転車」、Q20「地方・田舎ならではの自転車」、Q4「地元の若者ならではの自転車」であるが、Q11「楽しそうな自転車」とQ19「バイクっぽい自転車」においては回答が分かれている。このように３年生の男女との間に見方が若干異なる。また、カマチャリ利用者の多くは男子であることに注意すると、女子がQ21に対し肯定的な回答をほとんどしていないことは興味深い結果である。

上記に加え、地方の学生とって、自転車は通学手段であり、日常生活に欠かせない移動手段になっているという点に注目すると、カマチャリ文化は岡田［6］の指摘のとおり学生の生活と密接に関係している。さらに、種々の面で否定的な見方はあるものの、親の世代からカマチャリを引き継いでいる場合もあるので、カマチャリは若者文化であるという考え方が定着しており、山口［9］がいう“ブランド化”が確立されていると言えるので、広田ら［7］が考える文化としての位置づけと地方の若者に果たす機能は重要であると言えよう。

謝辞

本研究にご協力くださった高等学校のみなさんをはじめ、短大の皆様に感謝の意を表する。

参考・引用文献

［1］　Tony Hadland, Hans-Erhard Lessing（2014）『Bicycle Design : An Illustrated History』The MIT Press

［2］　BRI-CHAN（ブリチャン-ブリヂストンサイクルのファンサイト）. http://bri-chan.jp/2016/07/15/kamakiri/2017/12にアクセス

［3］　BICYCLE NAVI（2015）『“ミスター・ロードマン”が語る累計販売150万台の秘密ブリヂストンサイクル渡部裕雄さんインタビュー』BICYCLE NAVI 2015年1月号掲載.「ホームページ」 https://cyclist.sanspo.com/167563　2017/12にアクセス

［4］　市川孝一（2003）『若者論の系譜−若者はどう語られたか』文教大学人間科学部人間科学研究、第25号、123-130

［5］　伊奈正人（2004）『団塊世代若者文化とサブカルチャー概念の再検討：若者文化の抽出/融解説を手がかりとして』経済と社会：東京女子大学社会学会紀要、第32号、1−23

［6］　岡田宏介（2003）『マスカルチャー、サブカルチャー、ポピュラーカルチャー−文化理論とイデオロギー概念の変容一』ソシオロゴス、27、104-119

［7］　広田照幸（編）（2008）『若者文化をどうみるか?―日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー

［8］　小谷敏、芳賀学、浅野智彦、土井隆義（編集）（2012）『若者の現在　文化』　日本図書センター

［9］　山口晶子（2007）『若者文化としての学校制服－女子高校生の制服おしゃれに着目して－』子ども社会研究、13号、62-71

［10］　伊奈正人（1995）『若者文化のフィールドワーク―もう一つの地球文化を求めて』　勁草書房